

## シベリアの星の下で

岩手県 石橋 喜治郎

元陸軍少佐今藤勲の率いる元関東軍の将兵も、屠殺場に引かれる羊のようになっていた。長い地獄の歩みを終えてやっとたどり着いたソ連領内のウオロシロフの街で、有刺鉄線に囲われた建物に入った。蚕棚のような板敷で一夜、夜中に数発の銃声が聞こえた。眠りを邪魔されたが、またすぐに泥のように眠ってしまった。八月十三日、中隊長のわが分隊（長以下十人）に対する特命離隊以来、屋根の下で寝るのは一月半ぶりくらいになっていたろう。この日は九月の下旬だったと思う。

昨夜の銃声は脱柵日本人とソ連監視兵の撃ち合いだった。作業大隊指揮班長外三人が密かに携行した拳銃で応射しながら有刺鉄線を破って逃亡を図ったらしいが、その後の消息は知らない。国境守備隊に勤務していた

人達と聞いていた。あの人達がとった行動は、我々も成否は別として十分理解できる行動である。

この施設に入る前日、ウオロシロフの街が小さく見える最後の原っぱで野営した際に、ソ連軍少佐から短期間ソ連社会の復旧に協力してからダモイ（帰還）させると申し渡しがあつた。ここまで満州領綏芬河国境を越えて歩かされる間に、このままソ連領内の鉄道でウラジオストックからダモイさせるとの話が二転三転した。半信半疑の思いで、それでも祖国に帰る望みは持ちつづけて歩いて来た。それが困いの中に入れられ監視される身となり、そのショックは大きかった。万事休すとはこのことであろう。

拉古を出てからここまでの毎日は、食糧もない、寝る所もない、着る物もないのないない尽くし。俺はここまであんころ餅を眼の前にぶら下げられて歩き続けた、内地の土を踏むまでは死ねないと体に鞭打ち歩いた。この夢がこの日を境に消え、私は五年余りのシベリアでの強制労働に駆り立てられるとは。そこまで考えが及ばなかった。

この年、寒くなつた頃、原隊を一緒に出て敵戦車に遭遇、大陸を彷徨、武装解除、入ソ抑留と、行動をともにしてきた近藤（秋田県）、今野（山形県）の両君と別れてチリアンズの森林地帯の伐採作業地に移動、ウォロシロフを去り再び一緒になることはなかった。拉古編成の近藤勲作業大隊（一、〇〇〇人）ともここで別れ、ふたたび合流することはなかった。

これ以来、主に木材関連の労働のダモイまでの暮らしだった。夏分にコルホーズ（集団農場）とかソフホーズ（国営農場）で草刈りや稲刈り作業にも従事した。また建築現場で左官のまねごとをやり、石炭の燃え殻とセメントで大きなブロック作りも行った。それも森林地帯に入るまでのつなぎ仕事だった。

とにかく何の因果か、丸太の虫になり丸太との取組み合いで終わった。これも運命だったのか。

命取りの伐採作業に入ソ三年目の冬に従事したことがあり、抑留中最も厳しく辛い仕事であった。伐倒二人と枝払い・焼却一人の三人が組で、ノルマ・カンチャイ（基準量完遂）が至上命令だった。作業用具のピラ

（鋸）一、タポール（斧）一を携行して樹齢百年余の沿海州松の原生林に挑むのである。ズブの素人が立ち向かうのには立木が太過ぎて大変な難作業だった。

ソ連製二人引きの鋸のため、対面する二人が素人同士の組は相手と呼吸を合わせることを知らないで断面が平らにならない。このため鋸の動きが鈍くて、労多くして効が少ない。体力の消耗が激しく、ノルマの達成が到底無理である。毎日が早出・残業の連続だった。経験者同士組むと時間内労働で十分ノルマの達成が可能だったから、特別高い設定ではないと思えたが、大抵の伐採班にとっては荷が重くて労働に疲れ、はたまた飢えと寒さに泣き通した冬であった。

通直材は建築用として六・五メートルの規格に玉切りする。曲がり材と立枯木は二メートルに採材して薪用になる。広葉樹用材だけは五・五メートルに玉切りされた。単一規格だった。この点だけは頭を悩ます必要がないので助かった。木を倒すと一人がタポールで枝を落とし、その枝や末木を集めて焼却処理をした。

この一連の作業を三人一組で行う。必ず末木・枝条

はその場で焼く。それは森林火災の防止と伐採跡地の更新促進のために励行するのであろう。

立木の伐採で運が良いと余得がある。伐採木の松が朝鮮五葉の一種なので、樹冠に実を付けた木を倒すと歓声をあげて喜んだ。松かさの中にある実がちょうど銀杏ほどの大きさがある。これが脂肪の固まりのような美味しい食物だった。この時ばかりは警戒兵の警告も何のその、軽く無視してまず松の実を確保してか、次に作業に移った。何せ貴重な脂肪の供給源を見捨てるわけにはいかないのだ。多少の危険を伴うが敢然と取り組んだ。この松の実だけは現在口にしても必ず美味しい食物だと思う。彼らソ連人は向日葵の種子と同様に、口の中に入れ手を使わずに上手に殻を吐き出して食べていた。

ノルマの苦しさに耐えかね、カントーラ（監督員詰所）との交渉の結果、ピラの目立てとタポール研ぎの要員を日本人の手で行うようになった。道具が仕事を。つまりノルマ（基準量）の向上には仕事の段取りと道具が必要なのだ。これを彼らソ連人に理解させ

るには相当の時間を要した。

このほかに丸太の移動や自動車・貨車の積み込みも、当初棒切れを持って作業をしていたが、この作業にも捕虜の知恵で作った鳶の使用を持ち込んだ。原材料はあちこちに捨ててある自動車のスプリングを利用して、鳶に変身させて道具として使った。これらの道具がノルマの手助けとなり、体も少しは楽になった。

シベリアの夜空は実に綺麗だった。空気が乾き、余分な塵芥も少ない。清浄な大気が一杯なので、殊更に星の光が燦然と輝くような気がした。

少しは作業の道具が改善されても、根が素人同士の組はノルマの達成は夢のまた夢である。ノルマのできない者達は罰則の早出と残業が連日続く。朝起きて早飯を食べ、人より一足先に作業地に向かった。夜になっても定刻に帰れない。現場に居残りした。暗くて当然作業ができるわけもない。伐倒木に腰を掛けあるいは仰向けに寝ころんで消灯までの時間待ちをしている時に、南西方向の夜空に現れたオリオン星座の中で特に美しい真っ白な星が行儀よく三つ並んで見える。私達

はこの星を「上等兵星」と呼んでいた。三つ星の属するオリオン星座は赤道にあるために地球上のどんな片隅からも眺められるそうで、冬になると一段とはつきり美しい星として現れるのである。

その頃の私は、既に体力の限界を悟りつつ半ば諦めの境地にあった。春までの命が保てるか、抑留中の最大の危機の頃だった。魅惑一杯の星空を見ても、美しい魅力だの夜空の感動など一向に感じない。ただ悲しさだけだった。広がる夜空の端は祖国まで続く、星も変わりのない星だ。同じ星でも、場所と己が境遇によって感じ方に様々な相違があるのだろう。昔、流刑人が配所で身の不遇を嘆きながらも月を眺めてその心境を歌に託す余裕があったが、それ程の風流心も持たずに、ただひたすら望郷一途、遠い家郷の風物や人々に思いを馳せるだけだった。

そんな時に、どういう風の吹き回しか伐採作業から解放された。マシーナー・グルジー（自動車積み）に変わって、危うい生命がどうにか助かった。炭坑に従事するのとどっこいどっこの重労働といわれた伐採

作業は一冬の短い期間だったので命拾いした。今でもあの時を思うと鳥肌が立つのを覚える。

木材積みにはトラックと貨車の積み込みがある。どれも伐採に次ぐ重労働である。私はどうした因縁か、抑留中、木材と関係のある所で一番多く働いた。軍隊に入るまでの職業も国有林を管理する営林署に勤めていた。春から秋まで雑多な仕事の農場とか建築現場にいても、秋深くなると伐採作業地に鞍替えして丸太との取り組みに移った。嫌な腐れ縁が付きまわっていた。

丸太の積み作業の中で貨車列車への積み込みは、時間の制約があるし昼夜の区別がない。貨車の入り次第で作業するので大変不規則な労働で、随分泣かされた。朝・夕は雑炊をすすり、弁当は三百五十グラムの黒パンをかじっての体力、それに働く大義名分がない。無気力さも手伝ってはどんな仕事でも嫌気が先走りして楽な事はないのだ。

貨車に比べ自動車の積載の方は、ソ連人の運転なので時間内労働だったから心身共に余裕を感じた。使用車は自国製車両は一台も走っていない。全部米国製ば

かりだ。アメリカからの借り物の車だった。私達には珍しい十輪車に更に補助台車を付けた大型車が運搬していた。

長材の積み込み作業を簡単に書いてみる。自動車・貨車ともに、二本の輪棒を架け渡し、積む丸太の両端にロープを引っかけて反対側で引っ張り、輪棒の上の丸太を巻き上げて積み込むのだ。

一グループが十人内外で編成される。リーダーが車両の上に立ち声高らかに音頭を唱える。これに応じて一斉に掛け声を出して一緒に綱を引く動作を繰り返しながら長尺重量材を輪棒上で回転させて巻き上げる。作業要領とか動作の一切は、リーダーが唱える音頭の文句で指示される。

自動車・貨車ともに一車両の積載量は同じくらいだった。三十立方メートルほどとかという。見上げる高さまで積み上げるから、終わりの頃は渡した輪棒の傾斜が急角度となる。重くて途中で立ち往生することもあった。また、滑り止めのため、丸太と輪棒の接点に蔦口を使い歯止めを必要とした。この危険度の高い役目は

動作の機敏な者が担うことになる。自らも危険であるが、同僚達の命を預かっていた。

上乗りリーダーの一挙手一投足を凝視しながら彼の掛け声により揃って作業しないと不測の重大事故を招くので、皆一生懸命に気を揃えて作業した。ソ連には捕虜の労働安全衛生規則の適用はない。自分達で自分の生命を守るのが宿命なのだ。

四方八方の作業現場から音頭と掛け声が響き渡り賑やかであった。このリーダー達はもともと故国の東北や北海道で丸太扱いの経験豊富な熟練者で、何も知らない我々を指導してくれた。掛け声は昔からのヨイトマケと同じだ。作業指示の文句や即興の事柄を交えて唱えた。実に美声の持主が多かった。日本人捕虜製の蔦口(ドットコ)・木廻し(ガンタ)等の使い方も教えられたし、多少でも能率向上の要領を知り、体を楽にして働くこともこの人達から学んだ。

抑留後半、ダモイ(帰還)まで従事したのが二メートル材を有蓋貨車に積み込む作業だった。短尺の用材はほんの一部で、大半は薪用が多い。乾燥材だったり、

生材だったり、大径・小径木等雑多な短尺材である。

積み込みには人肩による方法しかないのだ。

長尺材を無蓋車に積み込む作業にも従事したが、作業の要領は全く自動車積みと変わりない。ただし、前にも書いたとおり、貨車の都合次第で時間との戦いと夜の作業が多くて辛かった。自動車積みの場合、一車積み終わると次が来るまで待ち時間があって気兼ねすることなく休息できた。しかし時々待ち車があると休む間もなく積み込みをする場合もあったし、ソ連人運転手の気まぐれな運行に振り回された。

長尺材の積み込みは、自動車・貨車積みともに相当高く積み上げるので、運行中荷崩れしないよう丸太の配置に熟練を要した。両端に置く適材丸太の選定が重要で、上乗りリーダーの腕の見せ所でもあった。

あの最低の労働環境の中で、実によく働いたものだ、その他大勢の素人集団を束ねて危険な作業をやったと、思い出しても背筋が寒くなる。勿論犠牲もあった。輪棒が外れて丸太が落ち怪我をした者もあったが、幸い死者が出なかった。それが不思議なくらいの危険な作

業に違いなかった。

短尺材の輸送は有蓋貨車が使われる。入口に丈夫な登はん板（歩み板）を架け渡し、大径材から順にこれまた人肩で運び込む。屋根付き貨車は大きく感じたが、トン数は判らない。車内の棚積みには、上手に空洞を作って実材積を少なく工夫するのが肝心だった。これが労働時間を左右するのだ。したがって内地での経験者を各貨車に配置する。上手に彼らはソ連人監督の目をごまかす工夫をするのである。内地でも、薪棚積みのときこんな空洞を作り、棚数を増やす慣行は知っていた。

貨車の両側から重い丸太を下積みし車内に縦に並べ、車内の中央から木口が見えるように積む。中央部の入口付近は横積みにするので最後まで残る。奥の方から天井まで隙間のないように詰め込む。積み込みの途中で巡回監視するナチャニック（監督者）の目を上手く騙して空洞を作るのに創意工夫を凝らしたものだ。

運び込む要領を書いてみる。軽い材は一人とか二人でじかに肩で担いで運び込む。丸太の直径とか重さに

より、金属の輪を丸太に通して担ぎ棒を入れ、歩み板を登って運び込む。担ぐ人数によって二点張り（二人担ぎ）から三・四・六点張り、最大級の丸太を搬送する八点張りまでがあった。六点張りとか八点張りになると軽業師のような芸当が要求された。

まず太くて重い丸太に金輪を通し、金輪にその棒より短い棒を通す。この棒の両端を支点にして担ぎ棒を当て、四人の肩で担ぐ。前後この要領で担ぐのが八点張り。重い後ろだけこの方法で担ぎ、前は二人で担ぐのが六点張りと称した。これで狭く傾斜のある歩み板を昇るのだから大変な労働だった。一人の一寸の油断が大きな事故になり、外の人達に大きな迷惑を掛ける。少しでも気を抜くことができない。緊張の連続の、危険この上ない作業であった。

人数が多くなるほど、背丈も同程度の者で肩の高さを揃えた。それに気の合う連中が組んで慎重に担がないと歩み板から転落して大怪我をすることになる。危険がいつでも付きまとう作業だった。

事故も時々発生した。帰国の直前に腰に怪我をした

宮城県人を記憶している。この作業は、何といってもお互いに意思の疎通を欠いては最悪の事態を招く。傾斜のある登はん板を重量物を複数の人間が担いで歩むのだ。特に後ろの者に荷重が重くかかるからグループの人選が重要だった。あの最悪の環境下で何とか無事に働いて今日があるのは、日本人リーダーの好配慮があつてのことであると感謝している。シベリアで体験した様々な労働の中では、自動車・貨車の長丸太積みも作業指揮能力が大切だったが、特に登はん板を渡って担ぎ上げる短尺丸太の運搬作業は最も指揮者の力量が問われた労働だったと思う。

日本内地でも昔の木材産業労働は重労働の仕事と言われていた。俗に木挽の一升飯食いと言われていた。それほど腹ごしらえを十分にして体力を維持しないと働けない仕事である。それが捕虜の身でろくな食食物の配給もない、飼い殺しの状態の中であれほどの労働奉仕をやった。たいしたもんだと自負している。私自身も体を使つての仕事は経験がなく、ペンより重い物を持ったことのない人間が命永らえて現在に及んでい

るのは、ラーゲル（収容所）の生活で良きリーダー達に恵まれた結果と想っている。

苦しい悪夢のような労働の明け暮れの中に、夏の夜、貨車積みの合間にふと空を見上げると、満点の夜空に金砂をばら撒いたような数多い星の中で北斗七星と北極星だけは簡単に探し当てたし、夏の宵の天の川を眺めることはできたが、他の天体を彩る星座や無数に存在する星の知識がなくて、名前はわからなかった。金星を知るだけのお粗末な人間だった。シベリアの生活でやっとオリオン星座を覚えた。金星が明け方東の空に輝きだすと一般には明けの明星と言われて夜明けが近い。そして作業も終わりに近かったので、大いに歓迎されるお星様だった。

私が五年余りのシベリア生活の中で身近で起きた怪我を目撃したのは、二件とも丸太の積込みの作業事故だった。それも鉄道貨車への丸太積みで、無蓋車の厚い側板が頭に当たった事故。それと薪材積みで歩み板から転落した事故で、いずれも瀕死の重傷を負った。耳に入った怪我人の数は数えきれないほどだった。そ

の人達のその後については一切知らない。

これらの作業事故も悲惨であるが、それ以上に身につまされたのが、抑留された年の冬と二年目の冬にかけての栄養失調による死亡者の続出である。あの頃はまさに生き地獄の中にいた。涙なしでは語れない。隣の戦友が眠るように静かに死んだ、これらの悲話は、多くの抑留者が体験談として世に出しているから省くことにする。

日ソ不可侵条約を反古のように破り捨て、突如ソ連軍は国境を越えた。張りの虎でしかなかった関東軍は赤子の手を捻られるように簡単に敗れてしまった。関東軍は全面降伏した。終戦後日本兵に対するソ連軍の取り扱いがポツダム宣言に違反し、ヤルタ会談の謀議云々とかで在満の将兵や民間人、婦女子まで直接戦争に無関係の人達も拉致して連行した。そして抑留し、まことに理不尽極まりない強制労働の暴挙に出たのである。その数六十万人も言われている。

私達は全く道理を無視してはばからぬソ連指導者と出会ったのが身の不運だった。相手が悪過ぎたのだっ



た。花の二十代、最も充実した時に無益な労働に青春を燃焼した。再び帰らぬ貴重な青春が惜しまれてならぬ。

この日本人が流した血と涙と汗の実態が日本の現代史から抹殺されて何ら記述されないとは、義憤を感じるのは私一人ではあるまい。抑留者の足跡が全く無駄花に終わるのが老いの身に悲しい。この事実は、世の中と政治が悪いのか、それとも我々抑留生存者の努力が足りないのかと、大陸で先に逝った同胞に誠に申し訳ない思いがする今日この頃である。

### 雑 詠

報い亡き凍土に滲みる捕虜の汗

飢えに暮れ寒さで明けた吾が青春

無駄花か凍土に散った若い戦友(とも)

眼が覚めた捕虜の寝床は丸太敷き

### 入隊前の略歴

昭和十五年三月

岩手県立盛農業園芸学校卒業

〃 六月

林野庁青森営林局川井営林署勤

務

十九年一月

現役兵として北部二十部隊入隊

(弘前)

〃 二月

騎兵第二十四連隊第二中隊に編

入(満州東安省宝清)

二十年八月下旬

横道河子オウダカにて武装解除

〃 九月上旬

拉古編成今藤少佐の率いる作業大隊で綏分河を経て入ソ、ウオ

ロシロフ第七分所に收容

チリアンズ・コンスタンチノフ

カ・マンゾフカ・ボーエンキ・

セミヨノフカの各所で抑留生活

に入り強制労働に従事

二十四年十月二十九日 帰還のため信濃丸に乗

船 ナホトカ出港

【執筆者の紹介】  
現住所 岩手県大船渡市盛町字権現堂二五―一七

〃 十一月一日 舞鶴上陸 復員

## 復員後の略歴

昭和二十五年一月 休職中の川井管林署に復職

以来 盛・久慈・一関・大船渡  
の各管林署に勤務

五十八年三月 定年退職

六十一年四月 岩手県大船渡振興局農林部非常

勤職員

平成五年六月 非常勤職員退職

現在の様子 健康の維持に努めながら畑を耕

作して自家用野菜を栽培

家族構成 老妻と二人の生活 子供は娘二

人ともに結婚して別居

(岩手県 田辺 壮久)

## セルロバヤ収容所で

岩手県 橋本達夫

昭和二十年八月という年月は、当時の全国民にとっ

て一生忘れ得ぬ出来事であった。もちろん今後とも絶  
対にあってはならないし、忘れてもいけない。それは  
五十二年前になる第二次世界大戦による日本国の敗戦  
であった。長い年月のことなので忘れていても当然  
かもしれない。しかしその戦後処理の中で私には忘れ  
られない出来事がある。

昭和二十年八月九日、ソ連軍の侵入時、旧満州国に  
関東軍として(資料によれば)二十五個師団、十個の  
独混旅団、総兵力七十五万とある。ただ、その内容に  
ついては、小銃・銃剣さえもない部隊というありさま  
だったという。

戦争の悲劇については数多くの戦記の中で述べられ  
ているが、満州第百七師団について、八月十五日の終  
戦も知らず八月二十九日の武装解除まで戦った師団を  
次のように指摘している。いったい満州百七師団とは  
何であつたらうか。満州、内蒙古、外蒙古の三国の境  
にあって、ソ連に近い興安嶺に駐在し万一のソ連軍の  
侵攻に備える人垣である。日本の戦史は、「南方ガダ  
ルカナルをはじめ軍部の誤まれる判断と無能な作戦に